



# 土木紀行

## 安積疏水「十六橋水門」

### 福島県郡山市

#### 開墾のはじまり

奥州街道の宿場町、安積地方（現在の郡山市）は、「安積三万石」と言われながら水利・水源に乏しい地域で、阿武隈川に注ぐ四つの支川の周囲に3千町歩に満たない水田以外は、雑草が繁る広漠とした原野が広がっていました。

この原野に早く目をつけ開墾を提唱したのが、明治4年に福島県典事として迎え入れられた中条政恒（旧米沢藩士族）であり、地元郡山の豪商らを説得して明治6年から開墾事業に着手し、数年にして百町歩余りの開墾に成功しましたが、以前として水の便は悪いままでした。明治9年、この地を訪れた内務卿大久保利通は、この開墾事業の進展と入植者による桑野村の誕生に大きく心を動かし、当時政府が抱えていた失業士族対策と殖産興業の一環として、安積疏水の大事業に着手したのが明治12年でした。

#### ファン・ドールンの功績

当時の利水事業としては画期的な工事であったため、内務省はオランダ人技師ファン・ドールンを現地に派遣し、猪苗代湖から安積原野一体の調査を行わせ、湖の水位が低下しても、湖を直接利用している会津地方の戸ノ口堰・布藤堰の用水に支障なく灌漑用水を確保する相関関係の解明と、「安積疏水事業計画」の指導を仰いだのです。

#### 安積疏水事業

国直轄の農業水利事業第一号地区となったこの事業は、猪苗代湖から阿賀野川を結ぶ「日橋川」の流可能力の改善および猪苗代湖の水位調整を行うことを目的とした「戸ノ口十六橋水門」（水門の数が16ある分水堰）と、郡山盆地へ取水する山潟水門（現在の上戸頭首工）を建設するとともに



現在の十六橋水門

に、幹線52km、分水路78kmの工事で、延べ85万人の労力と総工費40万7,000円（現在約400億円）を投じ、わずか3年で完成させたのです。

## 十六橋水門の変遷

戸ノ口十六橋水門は、完成した当初はすべてが石造りのアーチ橋で、橋梁と水門が一体となっており、湖面に面する側に間板を入れて水位および水量調節を行う角落し式水門でした。明治28年に水門は巻き上げ式に改良され、大正2～4年に水門と橋梁が分離された現在の姿に改修されましたが、ゲートは電動式ストニーゲートで、この形式の採用は日本の近代分水堰の中でも最初で、現存する貴重な存在となっています。

施設全体の老朽化が進行しているため、福島県では歴史的建造物である「十六橋水門」の改修と設備の整備を進めていますが、ゲート設備の部品を再利用するなど、できるだけ景観を変えない方法に配慮しています。

## おわりに

安積疏水は荒野を美田に一変させるとともに、落差を利用した発電にも利用され、都市用水を供給するなど地域経済発展の原動力となり、人口33万余りを誇る郡山市は東北の中核都市に発展しました。昭和45年から57年にかけて国営農業水利事業が実施され、調整池の新設、施設の近代化や集中管理体制が整備され、あわせて県営灌漑排水事業の実施により安積疏水の施設は面目を一新して現在に至っています。

（出典協力／安積疏水土地改良区（福島県郡山市））



安積疎水案内図

### 【交通】

- ・JR 磐越西線猪苗代駅よりバスで約20分
- ・磐越自動車道猪苗代磐梯高原ICより車で約15分、磐梯河東ICより車で約10分

### 【探訪コース】

福島県のほぼ中央に位置し、その透明度から「天鏡湖」とも呼ばれる猪苗代湖。湖の水が流れ出る日橋川を挟んだ東西約8kmに、幕末から明治にかけての史跡や文化財が点在しています。

たまには車を降りて、磐梯山・

猪苗代湖に抱かれた自然にふれながら歴史と文化が息づく水土里の路をゆっくり散策してみても。

猪苗代湖周辺では、テニスにゴルフ、夏のマリンスポーツ・キャンプに登山、冬のスキー、秋の紅葉、春の新緑と一年中自然とのふれあいができます。

日々の仕事で疲れた心身、散策やスポーツに疲れた体を癒してくれる温泉も豊富で選択に困るほどです。

### 【特産品】

もも、りんご、なし、ぶどう、さくらんぼ...四季折々のとってお

きの美味しいフルーツ。福島県は「果物王国」です。

高冷地の特性を生かし、盛んなそば栽培。良質なそば粉と名水でそばが美味しいのは当然です。

保存の効く身欠きにしんは会津地方の代表的な味。にしん、するめを清水で柔らかくしてから天ぷらにしてそばと一緒に食べる。一度食べると病みつきとなること間違いなし。

### 【問合せ先】

福島県耶麻郡猪苗代町